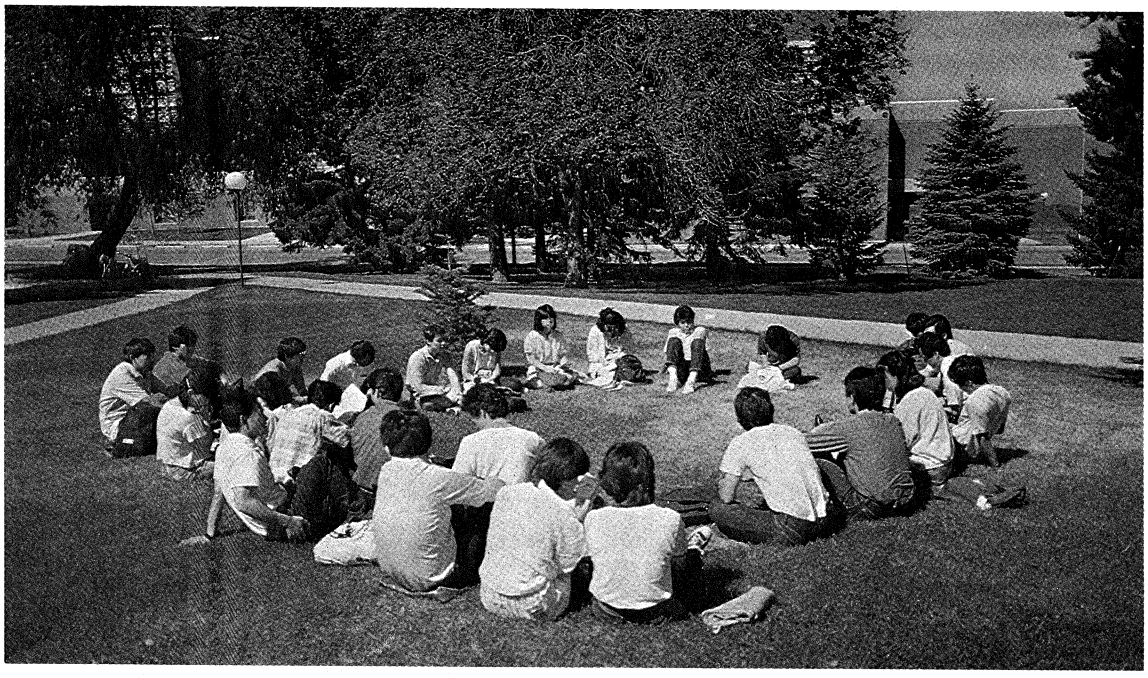
KUMAMOTO UNIVERSITY OF COMMERCE
KUMAMOTO JUNIOR COLLEGE

国際交流レター 第5号



第1回モンタナ研修サマープログラム終える

今夏8月7日モンタナ州立大学構内で企業ステイ後のミーティングを行う一行27人

CONTENTS

第1回モンタナ研修
サマープログラムを終えて……2～4
青木洋子　立石聡一郎　田中寿郎
交換教員ディーン・ドレンク準教授来学……5
マレーシア青年指導者一行本学訪問……5
昭和60・61年度教員海外研修決定者 ……5
探検部、中国・桂林洞窟探検記……6～8
中国留学を終えて　永平久雄……9
李景芳氏、本学での研修1年延長……9
イギリス留学を終えて　堀　治美…10～11
韓国・青蘭女子高校と姉妹提携して
赤塚六夫……12
ミュンヘン家庭滞在から見た
体験的ドイツ事情　上田信行……13

'84.11.10　熊本商科大学・熊本短期大学国際交流委員会

第1回モンタナ研修サマープログラムを終えて

姉妹大学提携先のアメリカ・モンタナ大学システム（ＭＵＳ）との交流プログラムの一環として今夏、「第１回モンタナ研修サマープログラム」が派遣され、所期の目的を無事果たした。帰途には、南カリフォルニア熊本県人会とも交流した。

派遣されたのは、男性16人、女性８人の学生と引率教職員３人の計27人で、７月15日に熊本空港（成田経由）を出発、モンタナ州立大学で講義を受けたり、州内12企業に体験入社したり、銅山やグレーシャー国立公園を見学したり、多彩なプログラムを通して交流を深めた。昨夏はＭＵＳから研修視察団23人が本学を訪れ、今夏は本学から訪問と、姉妹大学３年目を迎えて相互理解が深まりつつある。ここに３人の学生の手記を紹介する。

サマープログラム印象記

―――広大な土地と気軽さと

短大教養科２年　**青　木　洋　子**

このプログラムに参加することが決定したのは出発の半年前。それからと言うもの、毎日がAmerica気分で期待に満ちあふれていたのですが、いざ出発という頃になると、不安の方が段々と大きくなってきました。不安と言うのは言うまでもなく英語力！中学、高校、大学と英語にはほとほと悩まされてきた私だが、１か月以上も海外で生活するなんて！

Ｓeattleの飛行場で印象的だったのは、壁に描かれた絵（後に、街中ではビルの壁などに、そのような絵を多く見かけることになるのですが）まさか、飛行場の通路に絵が描いてあるなどとは思いもよりませんでした。

ＭＵＳのスクールバスに迎えられ、それから約１週間はバス旅行でした。Ａmericaは広い。これが第一の印象。道は前を見ても後を見てもひたすらまっすぐ。景色はと言えば、ちょうど草千里をどこまでも繋げたような感じ。道幅は広く、所によっては右車線と左車線が離れていて、反対方向に行く車が時々見えなくなる事さえあり、土地が余っている国だからこそ、道も自由に造れるのだなあ…と羨やむばかりでした。

ＴＨＥ　ＢＯＮ・ＢＯＥＩＮＧ・ＢＵＴＴＥの鉱山などの見学を終えて、ミズーラのモンタナ大学に到着。大学では、私たちを歓迎して昼食会を開いてくれたのですが、挨拶も簡単で、全く固苦しさを感じず、Ａmerica人の気軽さを感じました。Ｂarbecue Ｐartyなどになると、挨拶などあるわけもなく、本当にくつろげて、日本でもこのような習慣を真似してみたくなりました。

ＭＵＳに着くと、本格的な授業やＨome Ｓtay，企業Ｓtay などが組まれていて、毎日が充実していました。企業Ｓtayでは、私は保育園だったので、企業という組織のようなものではなかったのですが、子供たちとずっと一緒にいることで、Ａmericaでの教育方針がわかりました。保育園なので知識のための教育と言うよりもしつけの教育だったのですが、日本に比べて、放任的で個人が尊

重されているように感じました。Home Stayでは、１人暮しの女性の家だったので、毎日２人で日本の事やAmericaの事について比較をしたり、友だちを招待して庭でBarbecueをしたりして楽しく過ごしました。２週間という日々はとても早くて、毎日忙しくスケジュールをこなしてきたはずなのに、何もしていないような気分がしています。日本に帰ってきて出来あがった写真や、少ない自由時間の合い間をみて書いた日記を読み返してみると、改めてその時の事が思い出されます。

San FranciscoとLos Angelsはほとんどが観光でしたが、Montanaとはまた違ったAmericaの一面を見ることができました。

この研修は私にとって、今までで最高の経験です。私の今後の生活にも必ず、何らかの面で役に立つと思います。この研修はこれからもできるかぎり続けてほしいと思います。

ホームステイで知った アメリカの家庭

商大経済学部３年　**立　石　聡一郎**

１か月のアメリカ滞在で、私たちは色々な体験をしました。グレーシャー国立公園ハイキング・企業ステイ・ホームステイ・特別講義など、中でもホームステイは私にとって忘れることのできない思い出の一つだ。ホームステイは私には初めての経験であり、期待と不安が入り混じって何となく落ち着かない妙な気分でいっぱいだった。ホストファミリーの人が迎えに来てくれた時は、思わず緊張してしまったことを憶えている。ホームステイ先に着いた時、家の造りや庭の大きさを見てやはりアメリカだなと思った。

私のホストファミリーは、ビル・マーテル氏、リネル夫人、トニー、リサ、ジェイスンの５人家族で、トニーは、昨年ＭＵＳ研修視察団の一人として熊本に来ており、その時の話をしたりして結構打ち解けやすかった。また、彼が時々熊本で覚えたらしい日本語を口にするので思わず笑ってしまう場面もあった。郷に入れば郷に従えで、彼らの生活に溶け込もうと努力したが、言葉のハンディもかなりあって苦労した。私は英語はあまり話せなかったので言いたい事が言えなかったり、自分の話すことがはっきり伝わらなかったりしたことが大変残念で、もっと英語を勉強するべきだったと思った。

また、宗教的な事も日常生活に現れていて、夕食の前のお祈りなど日本にはその習慣がないので驚いた。

食事については、朝食はさして多くはなかったけれども、夕食になるとかなりの量が出るし肉をよく食べる。そして彼らは甘い物を好んで食べているようだった。これらの食事がおいしかった事は言うまでもない。

しかし、このホームステイでマーテル家の人達全員が私のために色々と気をつかってくれて大変感謝している。私にとってこの経験は言葉や習慣の違いを越えた大変素晴らしい経験だったと思う。

また、このホームステイとは別に企業スティの時、ホームステイさせて頂いたディブ・リー氏およびロスの熊本県人会の人達のことも同じく忘れることはできない。

このサマープログラムは、すべてにおいて

私達にとって初めての事で、たくさんの未知の部分があり、いま、改めて考えてみて私はこのプログラムに参加できたことを誇りに思う。これからもこのプログラムはずっと長く続くと思うが、この交流が両大学のつながりを益々発展させて行くのを期待している。そして、機会があればもう一度モンタナ、アメリカに行きたい。この交流に努力していただいたモンタナの教授・学生およびスタッフの方々に心から感謝を申し上げる。

ウェスト・バンクを訪ねて

——能力重視のアメリカ社会

商大経済学部４年　田　中　寿　郎

モンタナでの企業研修は、もっとも興味深いプログラムであり、有意義な日々であった。

企業研修が銀行と決まった当初、私はとても困惑した。というのも今まで金融関係の講義を受けたことがなかったからだ。しかし、幸いなことに私達の担当をしてくれたゴードン・ジョンソン氏は、昨年モンタナから来た研修団のメンバーの一人でとても親切にして戴き、私達も親しみをこめて企業研修をすることができた。

ウエスタン・バンクは、従業員数40名ぐらいの小規模の銀行で、支店もないということで、日本の銀行とは違っていた。また、日本のオフィスのように机が整然と並べられているのではなく、一人一人に十分なスペースがあるように配置されていた。このことは、自分の机が仕事場であるといった感じを受け、さらに各部署にはコンピュータがあり、オフィス内のＯＡ化を感じた。

日本ではよく、アメリカはキャッシュレス社会ということを耳にするが、モンタナにおいてもそれは確かに言えた。アメリカではチェックといい、日本で言えば小切手のようなものが普及していて、銀行業務の一つになっている。チェックの発行と整理に１フロアーを充ててあり、改めてキャッシュレス社会・アメリカを感じた。また、日本にはないシステムで、ドライブ・アップというものがある。これは顧客が車から降りずに、窓口サーヴィスを受けられるシステムである。アメリカのもう一つの面の車社会を象徴するシステムでもある。

私が感じた労働者の実態は、日本に比べてとてもリラックスして仕事をしているように感じられた。アメリカには、午前と午後１回ずつ、コーヒーブレイクがある。 10～15分間の休憩で、そのことが仕事に対して良い影響を与えているように思えた。また、日本の銀行のように顧客の家の回り、預金の勧誘やサーヴィスをするということはなく、銀行に来る客だけを対象にしており、アメリカにおおける銀行間競争が激化していると聞いていた割には、表面的にはそれをあまり感じなかった。経営者との関係は、企業内労働組合がないということで日本よりも厳しいみたいである。サラリーについては、各労働者と経営者の間で決定され、また毎年再評価されるということが社内規則で決められており、いかにも労働者の能力を重視するという点にアメリカの社会を感じた。

最後に、私達の質問にも快く答えて下さった皆さまの心づかいと親切に大変感謝している。

ＭＳＵとの教員交換始まる

第１号として ディーン・ドレンク 準教授が来学

一昨年７月の姉妹校提携に伴う教員交換計画の第１号として、モンタナ州立大学準教授のディーン・ドレンク（Dean Drenk）氏が９月１４日、アン（Ann）夫人、愛娘ジェシカ（Jessica）ちゃんを伴って来学した。

ドレンク氏（経営財務論・経営政策論専攻、４０歳）は、１年間滞在する。６０年４月からは経営学関係の講義を担当することになっている。

「どこに住むかもわからなかったが、なんとかなるだろうと思って飛行機に乗りました。１か月過ごしてみて熊本での生活は快適です。非常に温かく迎えてもらっています」と語っている。

住まいは、菊池郡西合志町須屋字宿山７１５－４２電話（０９６）３４３－６９７７。

なお、本学からはすでに中野裕治助教授（経営学総論担当）が派遣されている。

西ドイツ・ボン大学の一行19人が本学を訪問

７月２３日、西ドイツ・ボン大学日本文化研究所所長のジョゼフ・クライナー教授（文化人類学）、レギネ・パウワー助教授、ボン大学の２、３年生ら一行１９人が来学、北古賀学長らを表敬訪問ののち、高遊原研修所に宿泊した。一行は、熊本の歴史、風土等を学び取ろうと来熊したもの。

マレーシア青年指導者30人キャンパス見学と討論行う

１０月３日にマレーシアの青年指導者の一行３０人（内女性２人）が本学を訪れた。一行は政府主催のＡＳＥＡＮ青年招へい事業の一環として来日した公務員のグループ。一行はまず北古賀学長を表敬訪問。

学長は「本学は現在外国人学生入学試験を実施し、アジアからの留学生も受け入れている。本学に協力できることがあれば喜んでお手伝いしたい」と述べ、青年の代表が「先進国の日本に学ぶ事は多く、この招へい事業を大変喜んでいる」とあいさつした。

このあと学内視察、教職員・学生との座談会に移り、座談会では「どのようにしたら貴学に入学できるのか」など具体的な質問が多くなされた。

昭和60・61年度教員海外研修決定者

年度	研修名	所属	氏名	期間	研修先
60年度	長期留学	教養部	明石　喜嗣	未定（12か月）	英国・米国他
	長期留学	経済学部	田中　利彦	S.60年 8月～S.61年7月	米国・UCバークレー
	長期留学	教養部	西　紀昭	S.60年 8月～S.61年7月	中華人民共和国・北京師範学院
	短期留学	短大	高野　雅子	S.60年 9月～S.61年2月	西ドイツ・シュツットガルト大学
	海外出張	短大	園田　富雄	S.60年 6月～S.60年8月	米国・ウィスコンシン大学
	海外出張	短大	浜田　知明	S.60年11月～	イタリア・スペイン・フランス
	海外出張	教養部	牧野　洋一	S.60年 7月～S.60年9月	オーストリア
61年度	長期留学	教養部	北井　和利	S.61年 8月～S.62年7月	米国
	長期留学	商学部	小谷　正守	S.61年 7月～S.62年6月	西ドイツ・マンハイム大学
	長期留学	経済学部	山内　良一	S.61年 9月～S.62年8月	オーストリア・ウイーン大学

探検部が今夏桂林で洞窟調査を行う

中国・桂林洞窟探検記

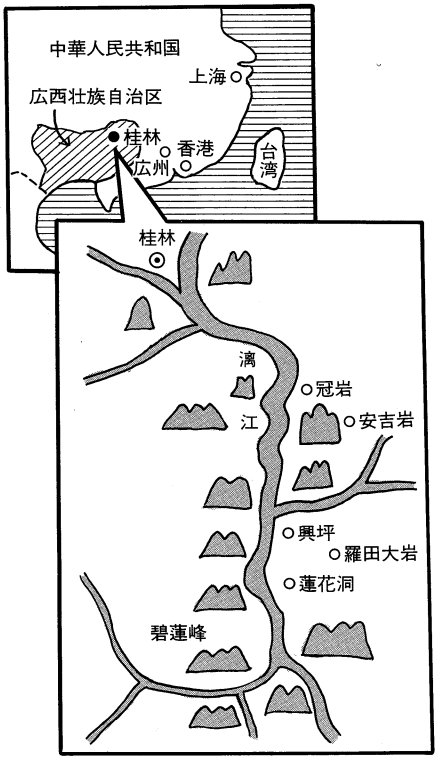
我々熊本商科大学・熊本短期大学探検部を中心とする一行は、夏休みを利用し8月7日から8月22日まで中国桂林の鍾乳洞の探検を行った。桂林市と熊本市は友好都市締結5周年を迎え、その記念事業の一環として今回の活動は行われた。

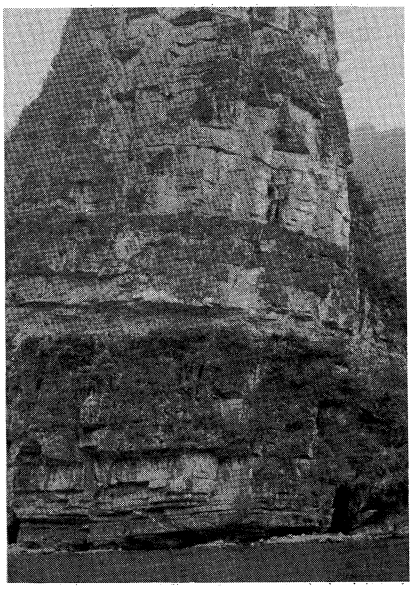
メンバーは我々探検部部員の8人の他に団長丸山和夫本学教授、副団長西岡鐵夫熊本市立博物館副館長、下田愁子本学職員の11人である。

ところで、この桂林での活動は、今年の2月にクラブの役員で話し合った結果、最近のクラブの低迷、活動のマンネリ化が目立つ一方、部員の減少など、さまざまな課題を抱えている問題を解決し、クラブの活性化に努めようとして発案されたものである。

また、以前から桂林の洞窟には興味をもっていたため、それを一度に解決できる活動となったのである。

しかし、それにしても中国は共産国であり、探検活動というものが簡単に実現できるとは思えなかった。そこで、探検部顧問の丸山和夫先生に相談をし、実現へ一歩前進できた。今まで顧問として、渉外活動や本活動の団長などで何かとお世話にはなっていたが、今回の活動を通してつくづく顧問の有難さを感じた。





漓江沿いにそそり立つ
石灰岩の山（右下に洞穴がある）

今回のような特殊な海外での活動は、とても我々部員だけの力では成し得なかっただろう。それにしても、我々は運が良かった。桂林とのコンタクトをとる為に、熊本市役所の広報課を訪ねたが、大学生の国際交流ということで大変ご理解をいただいた。また友好都市締結5周年を迎えることもあって、グッドタイミングだったわけである。

しかし、前例の少ない活動なので、桂林の洞窟についての資料はほとんど集まらず、結局は何も資料を持たずに活動に臨まねばならなかった。

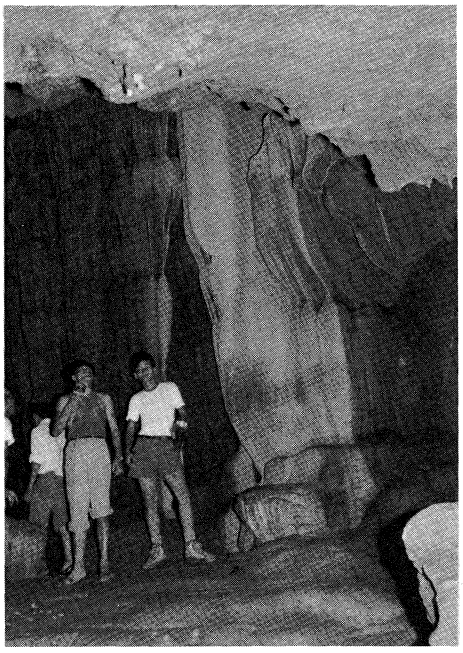
それに加えて、桂林との連絡には時間がかかり、当初計画していた7月14日からの活動が8月7日まで待たされることになった。ここに中国という国の性質がうかがわれた。何といっても「探検」ということの意味を解ってもらうのに何か月かかっただろうか。そういうこともあって、我々は、一時は夏休み期間中の活動をあきらめ、充分計画を練り直し来春まで待つ心構えもできていた。

そんな沈黙の状態も、市の広報課の方の熱心な働きかけで、どうにか夏休み期間中に活動が実現できたのであった。

桂林市では、盛大な歓迎をうけ、崔金才副市長をはじめ、外事弁公室の方々のお招きで晩餐会を開いていただいた。噂に聞く乾杯の連続を経験し、日頃活動で鍛えているものの、50度を超える酒の強さには、隊員たちは参った様子であった。

我々のような学生でも、温かく迎えていただき、星子市長もおっしゃられた通り、熊本と桂林の親戚のようなつき合いを感じた。

8月11日に、本格的な活動を開始することを決め、それまでの間、岩溶研究所、市内の観光洞を見学した。さすがに洞窟のメッカである桂林だけに、観光洞となると目を見張る巨大なものばかりで活動に対する期待と不安がいっそう増していった。



蓮花洞の中の大きなフローストーン

8月11日、活動開始。市内から40Km ほど漓江を下った所に冠岩という山がある。この山に洞窟の洞口があり、そこが我々のベースキャンプ地となった。

我々の活動の主な目的は、洞内測量と写真撮影だったが、測量は冠岩付近の安吉洞、青衣洞の2つを行った。青衣洞の洞口は、漓江から50mぐらい絶壁を登った所にあり、ワイヤーの梯子で洞口まで行かなくてはいけない。おまけに落石が多いので、生きた心地がしない所だった。そのせいか、この全長100mほどの洞内測量は1日で終らせるという驚異的なスピードだった。

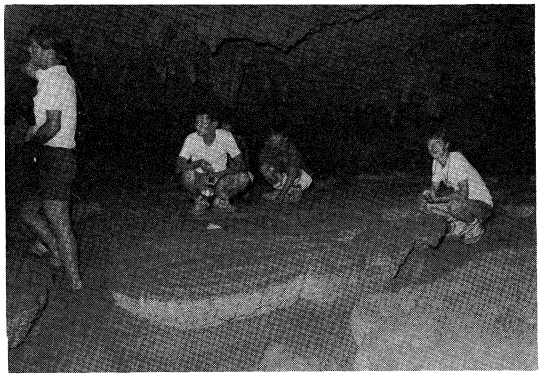
安吉洞は冠岩の丁度裏にある巨大な洞窟で、全長は8Km以上あると言われている。洞は三方に分かれて延びていて、その中の1つは地下川が流れていた。青衣洞にしても、安吉洞にしても石柱やフローストーンなどの鍾乳石の大きさは予想を上回る大きさだったが、純度が低い為か、美しいものはあまり見られなかった。また、安吉洞ではトンボの幼虫のような珍しい洞内生物を発見したが、今なおその正体は解らない。

全長8Kmもあると言う安吉洞の測量はスピードアップして行ったものの、地下川や落盤の多い巨大ホールなど困難な所ばかりで、結局、区切りのよい所で測量を終らざるを得なかった。活動期間が限られている為、急きょ予定を変更し、漓江を更に下った興坪に活動地を移動し、蓮花洞、羅田大岩の見学を行った。

次々に洞窟を見学して行くうちに更に巨大なものを追求するようになり、10mぐらいの長さの鍾乳石を見ても驚かないようになっていたが、羅田大岩の石柱を見たときはそんな気持ちは消えてしまった。高さ47m、直経10mという怪物だった。何億年という年月がこれを創ったのかと考えると気が遠くなる。

正味1週間という短い活動期間だったのだが、もっとたくさんの測量図を持ち帰りたかったし、ビデオなども用意して行きたかった。他にも色々な後悔が残る。が、しかし、ある程度課題が残っている方が、また行こうという気になるのではなかろうか。

我々は大変幸せだった。中国での探検活動は、あまり自由がきかないのだが、我々は野営活動を経験することができた。どこの大学の調査隊でも桂林の野営活動を希望しているが、これは大変困難で許可が得られない。我々もたまたま友好都市締結の記念行事という肩書があったから、スムーズに活動ができたのだろう。単に何の後ろだてもないならば、それは春まで待つどころの話しではない。



宗教的雰囲気が漂う蓮花洞

公式行事を離れ、市の広報課や桂林の外事弁公室などの方々に迷惑をかけることなく活動をすることは、今後の課題となるだろうが、幸いに桂林市にある洞窟研究を行っている中国岩溶研究所の皆さんとも交流ができたので、今後連絡を取り合い、お互いの情報を交換して活動を続けていきたい。

今、思い出すと桂林の山河が頭の中に浮かんできて、我々は本当に良い経験ができたと何度も思うときがある。準備の忙しさや長いこと待ったことが、余計にそう思わせるのかもしれない。

私は、現在の探検部部長だが、11月には役員交代となる。来年になるか、再来年になるか解らないが、是非、桂林でまた活動ができることを期待したい。

探検部部長・経済学部3年

安藤　廣幸

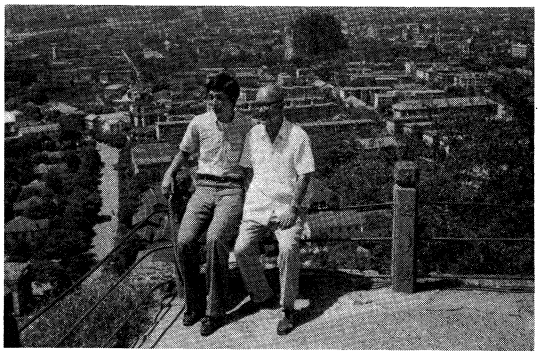
中国留学を終えて

商大経済学部3年
永　平　久　雄

熊本市派遣の留学生としては初めて中国の桂林市に去年の10月から1年近く留学したのですが、期間中両市は姉妹都市でもあり、友好の使者という意味での責任の重さも感じました。中国人に対する印象は「大陸的な考え方」という表現がありますが、正しくその通りだと思いました。

桂林では広西師範大学で勉強したのですが、中国の学校はそれ自体で一つの社会を形成しており、教師・学生・職員全てが校内に住み寝食を共にしています。また、学校は勉強をする場所であるという考えが徹底しており、勉学をする上での環境は抜群でした。

今回の留学で大勢の方々にお世話になったのですが、その中で最もお世話になった2人を紹介したいと思います。まず留学の最大の目的である中国語の教授李譜英先生、専門は音声学だそうで、方言の多い中国で留学生にとっては理想的な先生でした。教科書をテープに吹き込んで下さったり、僕らの寮の隣の部室に泊り込みで夜個人指導して下さったり、かなり良くして頂きました。もう一人はクラスメイトの莫偉寧君。僕が最も多く接した中国人です。彼は僕の中国語が少しでも上手になる為にと毎晩ラジオを聴くのに付き合ってくれたり、殆ど行動を共にしていました。また、喧嘩もしました。中国人と政治の話をするのはタブーだと言われていますが、彼とは何でも話をしました。けれども、政策、教育の異なる両国、どうしても話が平行線を辿ることもありました。お互いに母国を愛する気持ちは同じだったようです。



桂林市街をバックに李譜英先生と

クラスメートの莫偉寧君と（右：筆者）

彼に限らず友達と将来について語る時、これから国を発展させるのだという情熱、意気込みを強く感じました。中国で大学生というのはエリートであり、将来はリーダーとなる人々です。彼らは同じ東洋でもあり、戦後急激な発展をした日本にかなり興味を持っており、いろいろ積極的な質問を受け圧倒されそうでした。

今回の留学を通じて感じたことは、人間が求めている物は同じだけれども、環境（政治や教育）により、物の見方、考え方、価値感が大きく変わってしまうということ。ある意味ではショックでもありました。しかし中国の人々の心の豊かさに触れることが出来、とても幸せに思いました。今後、日本と中国の関係はますます深まってゆくことでしょう。そのためにもお互いに相手をもっと理解すべきだと思います。

李氏、本学での研修1年延長

昨年10月から客員研究員として本学で日本文学を研究している李景芳氏（女性）は、当初1年間の予定であったが、本人の強い希望があり、あと1年間本学で研究に励むことになった。

李氏は広西大学日本語科の教員で、熊本市内の篤志家の家にホームステイして生活している。

イギリス留学を終えて

講師　堀　治　美（英語担当）

1983年7月12日に、成田空港を発ち、1984年9月6日に同じ所に戻ってくる間、私の心はほとんど完全にと言っていいくらいイギリスに溶け込んでいたので、今の私の精神状態は非常に混乱している。イギリスの物差しを使ってきたのに、今は日本のを使わざるを得ない。なんと計り方が違うことだろう。各々が強い個性を持って、自分の信じる所に従って生きているイギリス人。それもかなりゆっくりとした時の流れの中で。ところが、日本に帰ってくると、皆が集団をなして、同じようなことを一緒にやっていると感じられることが多い。そして少々憑かれたような速度で。

時の流れをイギリスに戻そう。私はロンドン大学のユニバーシティ・カレッジ・ロンドンで、ノン・ディグリーコースの大学院学生として1年間学んだ。講義は1コマ60分で、1分のロスもないといった調子で進められる。話を英文学科に限ると、1人の先生がチョーサー（中世文学）から、ジェイムズ・ジョイス（20世紀文学）までを扱うという幅の広さにまず驚いてしまった。私も日本語でだったらできるだろうかと自問して、その気になれば、もしかしたら可能かもしれないなどと一人咳き、自らを慰めたものである。テュートリアル（個人指導）では、大いに鍛えられる。部厚い本を与えられ、読了後にディスカッションが待っている。大学では、ひたすら自信喪失との闘いであった気がする。

自信喪失から私を救い、本当のイギリス人の生活や物の考え方を教えてくれたのは、他の所で知り合った人々であった。ナショナルギャラリーが、私のもう1つの大学となった。日曜日を除く毎日、午後1時から45分間のランチタイムレクチャーに出席することが日課となり、そこへのレギュラーメンバーと微笑みを交わし始め、お茶を一緒に飲むようになる。公務員を定年退職し、余暇を歴史と美術研究に費やしているトムとメアリーご夫妻である。トムは美しいクィーンズイングリッシュで、次々に私の質問に答えてくれる。私が、アイルランドに旅行する予定と話すと、その悲劇に満ちた歴史について、ケルト民族の移住から始まり、私は詩人としてしか知らなかったエドモンド・スペンサーや、ウォルター・ローリーなどまでが、アイルランド征服に勇躍したこと、そして現在のＩＲＡにまで及んで語ってくれる。延々4時間にわたるアイルランド史の個人指導。鋭く光る深い眼に、温い微笑みを浮かべ、大きなウェーブの白い髪が額にたれるのを時々かきあげながら話すトムを、私は絵になる姿だと心の中でめで、何度スケッチしたいと思ったことか！深い思索が表情ににじみ出ている、実にいい顔をしているのだった。話は当日の美術講義に及ぶことも多かった。レンブラントの光と闇のコントラストのことや、ヴェロネーゼの絵のテーマやオーカグナの絵のスタイルなどについて話し始めると、会話は生き生きと流れ、私も水を得た魚の気持になるのだった。トム、ハルミと名前で呼び合うようになるのに、知り合って半年かかってしまった。イギリス人の慎しやかさと、真の誠実さと温かさとを、トムが確実に私の中に焼き付けてくれた。ランチに招待され、家庭でのイギリス料理は、あの悪評にもかかわらず、美味しいことも知らされた。

スコットランドで新年を祝う、ホッグメニーパーティで（中央：筆者）

テートギャラリーの講義でよく会ったのは、マークだった。彼は様々な情報をいつも私にくれた。「来週コーンウェイホールで。G・エリオットについての講演があるよ」といった調子で。彼はアメリカでの教師生活を捨てて、ロンドンに移り住むことにした贅沢な教養人。シティ・リットという成人学校に行ってみることを勧めてくれたのも彼だった。ロンドン大学の講義が、運悪く今年はチョーサー、シェイクスピアといった早い時期に、焦点をあてており、私がヴィクトリア朝の講義に出たがっていることを知っての推薦であった。シティ・リットでは、何らかの理由で教育の機会を逃したり、さらに知識を深めようとする10代、20代から80才位までの幅広い年令層の人たちが、様々な分野の講義に出ている。GLC(グレイター・ロンドン・カウンスル)の大きな財政上の援助があり、授業料は信じられないくらい安い。外国人の私までが、このような恩恵に与らせてもらって感謝あるのみ。一番おもしろかったコースは、「リタラリー・ロンドン」で、午前中にロンドンゆかりの文学者についての講義を聴き、午後から実際に皆で、その地を訪問するというものであった。気が付いてみたらいつも一緒に行動するようになっていたご婦人が、ロビンである。マッキントッシュと帽子がよく似合う、猛烈な演劇ファンであり、トマス・ハーディの愛読者でもある。別れる時には、愛蔵書の中から「ハッピーエンディングのものを二つあなたのために選びましたよ」と言って、ハーディの「アンダー・ザ・グリーンウッド」と「ファー・フロム・ザ・マディング・グラウド」をプレゼントしてくれた。帰国後すぐにも、ハーディ出身地のドーチェスターの絵ハガキで便りをくれたロビンの、いつも英文学の何かを私に与えてくれようとしている思いやりが、痛いほどに伝わってくる。

イギリス人の活字好きは、想像以上のものがあった。地下鉄の電車の中で、ほとんどの人が新聞か、本を読んでいる。私の親しい友人たちの中には、テレビを持たない人がかなりいた。夕方の静かな時間を、読書にひたすら費やしているようだった。ギャラリーの講義でも、成人学校でもかなりの年配の人たちまでがひたすら知識を深め、自らの世界を拡げ、掘り下げ深めようとしている。経済的に凋落していても、文化と知識の、そして精神の先進国であることは、間違いないのではないかという強い印象を抱いた。一主婦でしかないロビンの演劇論は、相当のものだという気がする。

ライにあるヘンリー・ジェイムズの家

小学校教師のジーンと、その夫マックスとは、家族の一員にしてもらったようなおつきあいだった。私が知らなかったイギリスの四季折々の花の名を一つ一つ教えてくれたのもジーンだった。香り高いハニーサックル(スイカズラ)を、初めて彼女の故郷、サセックスの田舎道で二人して嗅ぎ合ったり、イギリスの春は白い春と詩人が歌っているよと言いながら、柳の白い花や、白いホーソーン(さんざし)をじっと見詰めたりしたのも、ジーンとであった。ワーズワスが歌っている「一群の水仙」を見たがっている私のために、彼女が林の中の水辺で黄金色の群を捜し出して、二人して喜び合ったりもした。イギリスの自然や日常生活の隅々を、彼女が精一杯見せてくれた。

私のイギリスでの1年2か月は、様々な層で織り成され、畳まれ、また重なり合って、私の生活に10年分にも匹敵する新しい経験を加えてくれた。この歳月を可能にしてくださった全ての方々に、心からの感謝を捧げさせていただきたい。

韓国・青蘭女子高校と姉妹提携して

熊本商大付高副校長　赤　塚　六　夫

9月12日、空路ソウルに着いた答礼訪問団（園田校長以下一行13人）は翌日13日、忠清南道・大田市に私立青蘭女子中・高校を訪ね、職員生徒2,500人余の熱烈な歓迎をうけた。これをもって7月24日本校に於て調印された同校との姉妹校関係締結に伴う一連の行事は一段落である。

両校の姉妹校提携は、昨年の1月の熊本県一韓国忠清南道の姉妹提携を契機に、その後の相次ぐ各方面の相互友好訪問の中で、極めて自然な形で成立の運びとなったものである。園田校長はかねてより国際的視野を広めることの必要性を説かれ、海外交流の実践に意欲的であり、今回の韓国の高校との姉妹提携もその具体化の一つである。

調印文草案・場所・日程などについては、5月2日に同校を訪れた園田校長と裵校長の協議により決定したが、その席上、裵校長を団長とする調印代表団の来熊に同行する生徒22人のリストが手渡された。

調印式は本校体育館会議室に於て多数の来賓を迎え、厳粛な中にも終始和やかな雰囲気の中で行われたが、式場には青蘭の生徒達の姿はなかった。渡航許可申請等万端整った矢先の「事態の急変により生徒の出国不可能」の一報は、われわれを大いに失望させた。

調印後、握手する裵校長（左）と園田校長

多数の中から選び抜かれ、出発の日を心待ちしていた少女達の失意は如何ばかりであったろうか。われわれは改めてこの国が置かれている環境の厳しさを思い知らされた。しかしそれから2か月、われわれ答礼訪問団の訪韓の直前に行われた全大統領の訪日は、日韓の歴史に新しい一頁を開くものだといわれ、現にこの国を取り巻く情勢にも好転の兆しが見え始めた。青蘭の新しい友人達をわが付高に迎えられる日もそう遠くはないであろう。

今回の姉妹校提携については、改めてその意義を問われることがある。あちこちで行われているこの種の提携の多くが有名無実だとする批判がこめられてのことであろう。性急に功をあせることはあるまい。しかし、われわれはこれを線香花火的な一時のお祭り騒ぎに終らせてはならない。今回の答礼訪問に同行した生徒達は、帰国後その強烈な印象と感動を交々語ってくれる。慌しい日程の中で交歓の時間もごく限られたものであり、しかもお互いの国語は全く用をなさず、彼等の共通語は「英語」であった。話す能力には青蘭の生徒に一日の長があったようだが、これはここ数年来実用性に重きを置いてきたこの国の英語教育の成果であろうか。しかし、彼等にとって言葉は大した障害ではなかった。そこに繰り広げられた交歓風景の明るさとのびやかさはこれからこの若い世代によって築き上げられる新しい、純粋な、真の友好の姿をうかがわせるものがあった。

来春3月より付高の修学旅行に新しいコースが生まれる。釜山ー慶州ー大田ーソウルという韓国コースである。

今後年々多くの付高生がこの国を訪れ、青蘭の門をくぐることになる。かくして海を越えて新しい友情の輪が広がり、やがてはそれは両国のゆるぐことのない善隣友好の礎ともなるであろう。

韓国・大田大学から提携打診

韓国・忠清南道の大田大学から提携について打診があっており、本学では現在検討が進められている。

ミュンヘン家庭滞在から見た体験的ドイツ事情

総務課　上　田　信　行

今夏ミュンヘンで、ドイツ語研修という形で海外研修の機会を得たので、僅かではあるが、その研修の一端をお伝えしたいと思う。

ミュンヘンは、人口130万の南ドイツの大都会であるが、英国庭園に代表されるように町の半分近くは緑地帯と言われている。確かに、町には手入れの行き届いた大きな公園や運動広場が沢山あり、市民が気軽に散歩や運動をするのには大変恵まれている。7、8月のミュンヘンは、快晴で太陽が照り輝くと確かに暑いが、朝から雨が降ったり、曇天の日にはもう晩秋を感じさせるような天候となる。

ドイツの一戸建の一般住宅には、半地下室があり、2階建の家でも屋根裏まで部屋として活用し、階を造ってある場合が多く、部屋を増やしゆとりある家の合理的利用については日本と大きく異なる。部屋数が一般的に日本よりもずっと多いので、子供はみな自分の部屋を持っている。小さい頃から個室で育ち、自立性が重んじられるので自分で考え、処理し、自分の意見を持ち、それをきちんと言葉で表現するように家庭で訓練されているようだ。食卓で子供に対するテーブルマナーの躾は、親の重要な役割の一つになっている。

家庭での対話は非常に大切にされている。日本では、人間関係の基本となる対話が、家族が集まる食事時間や居間でのくつろぎの時間がいつの頃からか、テレビ等に取って替られている事がしばしばある。ドイツでは、人と人との心をつなぎ、結びつける絆は言葉であり、対話であると考えられているようだ。これはスタディーズミューニック校の授業の中でも、その一端が見受けられた。即ち、学習した言葉、表現を使って即座に文章の形にして口頭発表する練習、2人1組の対話練習、グループ討論が多かった。ド

民泊先のハルムス家にて（左：筆者）

イツでは言うまでもなく、西洋の人々の外国語学習の主な目的は、その言葉が話されている国で生活ができて、意思の疎通が計れる語学力を習得することのようである。従って、聴けて、話せることが大前提となるわけで、隣接した国が多いヨーロッパでは話すことが生活につながるのだから、どうしても必要になってくるのだろう。

民泊して1週間ほど経て、洗濯物がたまったので洗濯しようと思ったが、多分ハルムス夫人が、「洗濯する時は言って下さい」とか、「洗濯は・・でして下さい」と言ってくれるだろうと思って更に2日位待ったが、やはり何も言われなかったので、8日目に思いきって話して、やっと洗濯する事ができた。この事からもわかるように、ドイツでは自分の意思をはっきり言葉で伝え、主張しなければならず、自分から言わないと何も分ってもらえない。これは恰も社会全体の約束事のようだ。こちらから言った事に対しては、とても素直に理解しようと努力をしてくれるが、何も言わないと、日本的発想で相手が考えている事を察して何かをしてあげるとか、気を回して何かをしてくれるというような事はない。優しい気配りは日本人の長所だと思うが、特別に言わなくても分ってくれるなどという発想は、日本でしか通用しないことである。

今回の研修を通じて、毎日の生活をふり返り日本やドイツ的物の見方、考え方等も学べた事は自分なりに大きな収穫であったと思う。

熊本市大江２丁目５番１号
熊本商科大学
熊本短期大学
〒862　TEL.(096) 364－5161

編集：広報・国際交流室